

信濃教育

巻頭言

「予想される生徒の反応」

若いころ、学習指導案に「予想される生徒の反応」を書くよう教わった。その当時はあまり考えずに書いていたように思い出す、よく考えてみればこの「生徒」（あるいは「児童」とは誰のことなのであろうか。「平成三（一九九一）年長野県小学校教育課程指導書理科編」には、「児童がどんな反応をするか予想して、児童の立場で表現する」とあるが、誰とは明記していないから、対象となる学級の子どもたちすべてということなのだろう。ここで大切なことは、授業のねらいや学習展開、留意点などは教師側の計画であるが、「予想される生徒（児童）の反応」は、子ども側から事象や活動を見るところである。子どもがどんな感じ方をし、何を考え、何を求めるかということが予想されずに、指導計画はたてられない。つまり授業の成否は、子どもの反応を予想できること、子どもが見えていることにあるように思える。

「これを見たらAさんはどう思うかな」「この時Bさんはどうするか」と、目の前の子どもたちの意識や行動を予想しながら構想するのが授業づくりである。一人ひとりの個別の子どもを想定せずに計画する授業なら、VTRでいいではないか。先生は子どもを常日頃からよく見ていて、この子たちだからこうする、その時この子にはこうする、と予想して授業を計画し行う。だからそこで行われる授業は、その先生とその子どもたちだから実現する、限りなく固有性が高い一過性の出来事である。授業は先生と子どもたちが織りなす物語なのである。

かつてある研究会で、「予想される生徒の反応」が、「Cさんはくすするだろう」と、生徒名で記述されている指導案を見て、なるほどと思ったことがある。子どもの感じ方や考え方や行い方は一人ひとり違う、であれば生徒名で記述するのは至極当然にも思える。また、それを座席表に書く先生もいて、真似したことも思い出す。しかし、こうして行った授業で、教師の予想を遙かに超える子どもや、予想と全く違うことを考える子どもが出てくる。予想通りにいかないのが子どもである。だから授業はおもしろいのだ。